

必要感から生まれる楽しさと実感

先日、参加させていただいた「全国小学校家庭科教育研究全国大会（東海・北陸地区小学校家庭科教育研究会）」の中で、熊谷有紀子協会調査官（文部科学省）から、家庭科研究会の会員数の減少という課題の解決策として、

「先生方に『**家庭科って楽しいな。家庭科の授業づくりは、他教科等の授業づくりにつながる。**』ということを実感してもらうことが大切。その後専門性を磨く、という発想が大切になってくる」というお話がありました。

また、家庭科における問題解決的な学習について、問題を見いだして課題を設定するためには、【学習への必要感】＋【自分でできるようになりたい（成長したい）という思い】が必要であり、これらの学習を通して、自分の生活がよりよくなる、今よりいいことがある そうだと子供たちが実感できるというお話も聞かせていただきました。

全体会に先駆けて行われた三重県亀山市立亀山西小学校5年生「着方の工夫で快適に内容B(4)ア(7)」の授業において、衣服の働きを知識として理解した後、子供たちになじみのある地域のイベントに参加をするための衣服を、既習事項を生かして根拠を明確にして考え、意見交流後に学習を振り返るという授業が展開されていました。実際にそのイベントに参加した経験やそこで体験できるスポーツ（ラグビー）の特性と既習事項を組み合わせられるように、担任である授業者が的確な実態把握のもと、子供たちの言葉を大切に作る授業がつくられていました。季節や状況に応じた日常着の快適な着方についての理解をし、よりよい生活にするために問題を解決しようと主体的に取り組む子供たちの姿がそこにはありました。

亀山西小では、家庭の事情や背景を把握した上で、担任による家庭科の授業が展開され、今の生活にどのように役立つかを具体的に提示することで、子供たちが「家庭科の学習は、今の生活に役立っている」とほとんどの子が肯定的にとらえているというデータを目の当たりにし、必要感から生まれる楽しさと実感は、子供たちそして授業者のよりよい生活につながるということを研修することができました。

蒲小 5年「ミシンで楽しくソーイング」

【実践内容】

本学習では、ランチョンマットを作る活動を通して、ミシンの基本的な操作を理解し、直線縫いや返し縫いができるようになることを目標としている。児童にとってミシンを用いた学習は初めてとなるため、進度に差が出たり、つまずいたりすることが予想された。そこで、以下のように指導を工夫して取り組んだ。

(1) 地域ボランティアの協力

CS担当と連携を図り、地域の方に、ミシンボランティアを募った。上糸や下糸のかけ方、ミシンの操作方法など、児童の困り感に寄り添って、教えてもらったり手本を見せてもらったりした。

(2) 一人一台端末を用いた動画活用

グーグルクラスルームに、1時間の活動の中で必要となる操作の説明動画をいくつか貼り付け、つまずいた児童が、個人で動画を見ながら作業できるようにした。



<ミシンボランティアの様子>

【成果】

地域ボランティアの協力があつたことで、個に応じた支援を丁寧に行うことができた。また、教師も、裁縫が苦手な子やつまずいた子に対する支援を迅速に行うことができた。そのため、どの児童もミシンの基本的な操作を理解し、楽しんでミシンの学習に取り組むことができた。

(文責：永田 雪菜)

西小 6年「できることを増やしてクッキング」

【実践内容】

本校の6年生は、家庭科の授業に対し、意欲的な子が多い。日常的に、家庭での仕事を担っている子もいる。本単元では、「いためる」ことを学習し、自分にできることを増やすという目的で行った。

(1) 栄養教諭との連携

栄養教諭が実習の計画から振り返りまで参加した。「ゆでる」と「いためる」調理法の違いについて学んだり、給食の献立はどのような調理法で行われているか考えたりするなど、具体例とともに学ぶことができた。

(2) 地域ボランティアの募集

学校支援コーディネーターと連携を図り、地域ボランティアを募集した。1グループに1人以上ついていただき、野菜の切り方や、炒め時間など、児童の様子を見守りながら、細かくアドバイスをしていただいた。

【成果】

地域ボランティアの方々や、栄養教諭の協力を得たことで、児童が困ったときに、すぐに聞くことができ、授業を効率的に進めることができた。また、教員一人では目が行き届かないところも、多くの目があることで安全性を高めることができた。



<栄養教諭の指導の様子>

(文責：伊藤 南緒)

第3回家庭科研修会報告 <和田小>

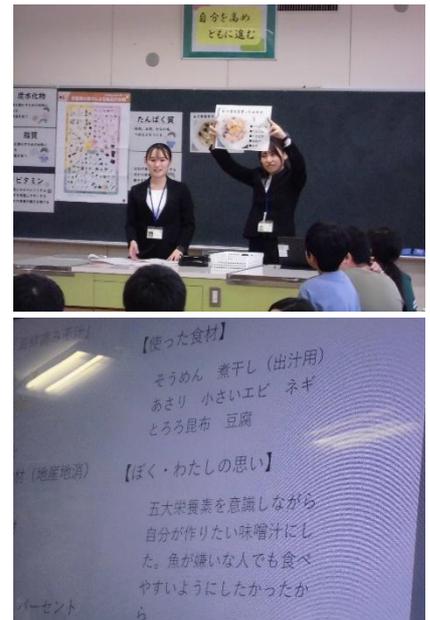
1 授業の様子

和田小学校5年生、北原先生、栄養教諭の大坪先生による「食べて元気に～思いが詰まったオリジナルみそ汁を考えよう～」の授業では、本題材の第11時の授業が行われました。

本時は、これまでの学習を生かして、自分の思いが詰まったオリジナルみそ汁を考える授業でした。

初めに、だしの役割や五大栄養素の働きを確認しました。その際、給食のみそ汁には旬の食材や浜松産の食材が使われていることを紹介することで、栄養バランスや食材をよく考えた上で作られていることを知ることができました。また、実際に給食を作っている調理員さんの思いも聞くことができました。

次に、みそ汁のテーマごとに分かれて、オリジナルみそ汁を考える活動を行いました。考える際には、オクリンクのカード4枚を使ってまとめていきました。1枚目のカードには、「使いたい食材」を書き込みました。その他に、「栄養バランス」「彩り」「浜松の食材」「旬の食材」の4つについて、星の数で自己評価をしたり、どんな思いでみそ汁を考えたとかを「ぼく・わたしの思い」として書いたりしました。2枚目以降のカードは、五大栄養素や食材を探せるリンク等が見られるようになっていて、子供たちが自分の思いに合う食材を考えることができました。作成後には、グループの中で交流をし、グループごとにベスト1を決めていきました。



全体交流では、考えたオリジナルみそ汁について、理由とともに発表しました。一人一人が、自分の思いを込めたみそ汁を発表し聞き合うことで、オリジナルみそ汁作りへの思いを深めていました。

2 グループ協議

- ①「ICT 機器（オクリンク）の活用は、話し合い活動に有効であったか」の視点より
 - 発表や個人作業のときには、活用がしやすかった。
 - どの児童も取り組むことができている、活動に参加できていた。
 - 話し合いの視点が絞れたり、オクリンク内で全てが完結できたりしていたところよかった。（他のサイトやツールを探す必要がない）
 - 全体を見通してのカードが用意されていて、とてもよかった。
 - △自分の思いを伝えるだけになってしまったので、友達から疑問点を出してもらったり、練り合ったりするとよかったのではないかな。
 - △資料は、教科書やグループで共有するなど、紙媒体であると使いやすかった。
- ②「オリジナルみそ汁を考える活動が、普段の食生活を振り返り、今後の食生活に活かすことにつながっていたか」の視点より
 - 児童の振り返りの中に、苦手なものを克服しようとする姿やコメントが見られ、「よくしていきたい」という思いが持っていた。
 - 自分や家族のためなど、思いを持って考えている児童が多く、今後の実践に活かせる内容であった。

○五大栄養素についての理解がきちんとされていて、今後につながるものであった。
△子供たちが実際に作ることを考えながら取り組めていると、使う食材や数がより具体的になったのではないか。

③その他

- 教師の振り返りコメントがよかった。
- 知識の定着がされていてとてもよかった。

3 静岡大学 小清水貴子教授の講話より

北原先生と大坪先生の授業は、「B 衣食住」の(1)(2)(3)を網羅した授業であり、今までの学習を生かした題材構成になっていた。「食べて元気に」の学習では、だしの役割やみそ汁の役割について学ぶことが大切である。

今回の授業では、導入で、だしの役割の振り返りが行われた。だしが入っているかどうかは、色の他に、香りや味等で判断をすることができる。子供たちからも「だしがある方が美味しかった」「いいにおいがした」という発言があった。小学校では、安全で見取りがしやすい点からにぼしが使われているが、家庭によってだしの種類は様々である。オリジナルみそ汁の食材の中に、だしが入ってくると、より今までの学習が生きたものになる。

また、今回の授業は、みそ汁のみを考える学習であったので、みそ汁の実を考える際に様々な食材が多く使われていた。本来のみそ汁は、一汁三菜の一つであり、「栄養素」「消化吸収」「塩分補給」「リラックス」「献立の調整役」という役割がある。ぜひ、みそ汁の役割を知った上で、食材を考えていけるとよりよいオリジナルみそ汁になっていく。

家庭科は「生活をよりよくしようとする力をつける」ことを学ぶ学習である。今回の授業の中で、たくさんの思いが詰まったオリジナルみそ汁が考えられていて、今後の生活にもつながっていくものであった。



第3回家庭科研修会報告<都田南小>

1 授業の様子

都田南小学校5年生、岩本葉奈先生により「食べて元気に～みんなにやさしいご飯とみそ汁～」の第11時の授業が行われました。

子供たちは、本時に至るまで、総合的な学習の時間において環境について考えてきました。本時では、前時に立てた一人一人の調理計画について、栄養、色どり、旬などの視点からアドバイスし合いました。特に、環境へ配慮した計画や工夫について「愛・地球ポイント」と名付け、よりよい調理計画になるよう、話し合いをしました。その際、オクリンクプラスを用いて意見を共有したり、保存したワークシートから既習事項を自由に確認したりする姿が見られました。交流場面では友達からもらったアドバイスを付箋に記入し、自分の計画を再度見直すヒントにしていました。

ICTを用いることで、一人一人のニーズに合った学習が展開され、主体的に学習に取り組むことにつながっていました。



また、総合的な学習の時間と関連させた題材計画を立てたことで、環境への配慮という視点において、家庭科教材だけでは得られない深い学びや発言につながっていました。

2 グループ協議

①オクリンクプラスで調理計画を立てたり、グループで話し合い活動をしたりすることは、課題を夢中になって追究し生活をよりよくしようと工夫することにつながったか。

○前時までのワークシートの蓄積があり、自分が見たいときに過去の学習記録をすぐに確認することができていた。

○他の子の考えが手元で見られるのがよい。子供にとって分かりやすく、グループ内の意見を比較しやすくなっていた。

○発表が得意ではない子も、話し合い活動に参加できるようになっていた。

△画面に向き合うことが多かった。タブレットは思考を深めるためのツールとして使わせたい。話し合い活動を通して思考が深まったり、広がったりできるとよい。

②総合的な学習の時間と関連させて、環境への配慮の視点に重点を置いたことは、見方・考え方を働かせた深い学びにつながったか。

○教科横断的な学習を行ったことにより、家庭科の学習だけでは出てこないであろう意見が出てきていた。

○SDGs やエシカル消費など、総合的な学習の時間で学んだことから、家庭科の見方・考え方を働かせた深い学びにつながっていた。今後は、家庭科で学んだことが総合的な学習の時間の追究活動の深まりにつながるとよい。

△環境への配慮について、具体的な意見が出されていたが、実生活において、実現可能かバランスを考えていくことも大切である。

3 市教委指導主事 前田浩平先生の講話より

食生活における「調理の基礎」の2学年間を見通した題材配列と指導内容を確認すると、2年間で4回の調理実習が設定されている。それぞれの指導項目を確認し、5年・6年の内容のつながりや連携を意識して題材計画を立てていく必要がある。

また、ICTの活用は個々の変容した考えや学びの足跡が蓄積できるところが強みである。友達との共同編集や意見の共有も可能である。さらに、個別最適な学びに向けても、今後は知識やデータベースを子供と教師が互いに共有し、活用し合う授業モデルに変化していく。すでにICTを使った多くの実践が紹介されているので、今後の授業作りにおいて参考にするとよい。

浜松市では、キャリア教育を推進しているが、ライフキャリアとして考えた時、家庭生活、家庭人がベースにある（詳しくはまどNo.470参照）。これからも家庭科教育に力を注いでいくことが大切である。

【編集後記】

第3回家庭科研修会では、オリジナルみそ汁を一人一人が考えたり、環境に配慮した計画を立てアドバイスをし合ったりと、様々な工夫をした授業を参観することができました。また、ICTの活用も積極的に行われ、家庭科の学習の中での活用方法についても学ぶことができる授業となりました。今回の研修で得た事を、各学校での家庭科の指導に生かしていけたらと思います。

上島小学校 鈴木 あゆみ